



1st English - 日本語 Edition



第 94 号

飛翔

HISHO



特集

IAS x IGS

合班交流紹介

IGS & IAS
PROFESSOR
INTERVIEWS

School of Integrated Arts and Sciences

総合科学部

★飛翔 94号 目次★

◎巻頭言		… p. 2
◎研究室紹介	齋藤祐見子先生	… p. 4
	岩永誠先生	… p. 6
	有賀敦紀先生	… p. 9
	崔真碩先生	… p. 12
	淺野敏久先生	… p. 14
◎OB 取材	新庄秀臣さん	… p. 16
◎輝いている人	中村海人さん (27 生)	… p. 18
◎特集		… p. 21
◎レビュー		… p. 25
◎飛翔な日々		… p. 27
◎飛翔後記		… p. 28

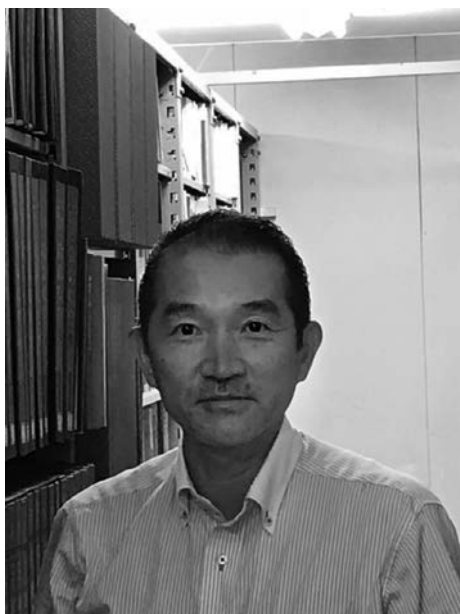
ここからは英文表記となります

◎Professors Interviews in English		
	Akira Machida	… p. 2
	(町田 章 先生)	
	Miki Shibata	… p. 5
	(柴田 美紀 先生)	

巻頭言

荒見 泰史

(研究科長特別補佐)



自分の「好き」を大切にしよう

総合科学部・総合科学研究科の皆さんこんにちは。皆さんの学部、研究科で国際担当（東アジア担当）の仕事をしている荒見と申します。この号

の巻頭言を書くことになりました。よろしくお願
いします。

さつそくですが、題名にある「好き」について、
皆さんそれぞれ考えていただきたいと思ひます。

皆さんそれぞれ「好き」なことがあることと思
ひます。それが将来に繋がるような「好き」かど
うかわからないかもしれませんが、いつまでも
「好き」であり続けることはたいへん大切なこと
だと思ひます。勉強するにしても、仕事をするに
しても、「好き」でなければ続けるのは辛いと思ひ
ます。また逆に「好き」であれば、寝食を忘れて
没頭することができましょう。そして好きであ
り続けることによって何かに没頭することは、大
きな力となり、大きな成果を生む源である事は間
違いありません。

私自身はといえば、若い時にはその「好き」が
何なのかよくわからず、もがいていたような時期
を過ごしたことがあります。若者特有の何か行き
場のないエネルギーのようなものが他の人より
少し強かったのかもしれない。そうした中で何
が「好き」なのかわからず、様々なことに当た
っては砕けてきました。私自身よくなかったのが

「負けるのが嫌」という感情が強すぎたことで、
結果として何をやってもなかなか長く続けるこ
とができなかったのが「砕けた」原因のように思
ひます。今になって、あの時の「あれ」を続けて
いれぱと思ひことも結構あります。

私自身の転機になったのは中国へ留学したこ
とかもしれません。大学では漢文を専攻しており、
多少は中国語を習う授業はありましたが、古典漢
文を訓読するのが中心で中国語は全く話せない
状態でした。しかし、今から30年近くも前のこと
で、まだ日本人で中国語が話せる人は今のよう
に多くはなく、また日本へくる中国人留学生もごく
少数の時代です。また留学して間もない1992
年には天皇訪中にむけて日中関係が好転し、日中
両国語ができるととても重宝される時代になっ
てきましたので、専門の勉強も忘れ、帰国するの
も延期して中国語の練習に没頭していました。
他の人ができないことができるようになってい
くことが純粹に面白かったのだろうと思ひます。
中国語が少しできるようになると中国、さら
には中国語文化圏のことがとても面白く感じるよ
うになりました。それまで漢文は祖父、曾祖父が

みなお坊さんか漢文の先生という家庭だったの

でそれなりに中国のことが好きで勉強していましたが、中国語が上達して中国にしばらく住んでから漢文を読むと、見えてくるものがまるで違ってきました。生活習慣や考え方の違いの中ではありません。生活習慣や考え方の違いの中ではありません。生活習慣や考え方の違いの中ではありません。

現在、専門はなんですかと聞かれると、本来の専門である中国文学、敦煌学あるいはシルクロード学ですと答えています。最近書いている文章からみると、時代は古代から現代まで、ジャンルは言語文学から舞楽、画像、宗教まで広がっています。知らない人を見ると、きつと何の専門家かわくわからないのではないかと思いますし、自分でもどう收拾をつけようか悩んでいるところでもあります。でもそうやって東アジアの漢語文化圏の中を見回して、何が「違う」のか、なぜ「違う」のかを見てまわって、考え、人に話して、文章に書くのが最高の楽しみになっています。もはや「仕事」と「遊び」の区別もないように思えて

います。

仏教の『維摩経』というお経の中に「入不二法門」と「不可思議解脱」という境地が書かれています。「不二」というのは「二つではない」という意味で、「苦」と「楽」のような対立する二項を「不二」つまり同じものととらえよ、という教えを説くのに使われます。そもそも二項の対立は「差別（しゃべつ）」するという人間の意識により生まれるもので、そのような意識が「苦」のもとになり煩惱となる。それを消し去るためには「不二に入る」ことが必要で、そのような境地を「不可思議解脱」と言います。そして、その境地に入るのには「遊戯三昧」つまり「遊戯」に没頭することを最高の手段と言っています。私自身がその境地に至っているというわけではありませんが、「好き」で没頭してきたために、すくなくとも「仕事」と「遊び」はかなり接近してきています。

総合科学部にもずいぶん感謝しております。このような楽しい生活は、あるいは総合科学部が支えてくれていると言ってもよいのかもしれない。広島大学のキャッチコピーに「学問は最高の遊びである」と言うのがありますが、まさにその

通りだと思えます。総合科学部にはいろいろな専門の先生がおり、それぞれの専門の垣根も低く、専門が違っても熱心に話を聞いてくれる先生方、学生諸君がいます。そしてそれぞれの興味の角度、専門の角度から自由に「なぜ」が飛びかいます。この「なぜ」は往々にして純粹で、それ故的に射ていることが多いです。そうした刺激を受け、その「なぜ」に答えつづけることが、研究の関心を広げるのにもつながっていると思っています。皆さんも、是非「好き」を大切にして、没頭してみてください。